

会報 2 号の発行によせて

学校法人昌平齋 理事長
田 久 孝 翁

「経世済民」、世を治め民を救うことは政治、経済の基本であり、今更申すに及びませんが、論語の中のこの四文字に秘められた意義は今日の政治、経済の上に必ずしも活かされているのかどうかである。

文字を表すことも哲学の一種には相違ないが、何よりも大切なことは文字通りに実行することによって得られた体験が、初めて哲学という収穫になって現れるものなのである。従って、実動が伴わなければ経世済民という文字自体、その意味は空文化し、そこには哲学は生まれては采ない。それが今日の政治、経済であり、平成恐慌を醸し出す要因ではないだろうか。

このように分析してくると、孔子が活躍した中国の春秋戦国時代（紀元前四五〇年）とは、どのような時代であったのか想像に難くはない筈であります。

諸子百家と言われた時代的背景の中で論語は中国の国語、国定教科書として定められたことから、当然、思想文学、天地、理化学等々に対する全ての側面を哲学的真理によって補足（ホロー）されたものが即ち、論語の実体として二五五〇余年の今日に至るも世界四大聖人の一人に数えられている。その人が即ち「孔子」である、ということを改めて認識した言葉に儒教ルネッサンスがあります。

この程、本学の論語素読会会報、修報第二号発刊に当たり、「経世済民」を取り上げました背景には二つの理由があることを上げて置きたいと思えます。

先ず一つは、東日本国際大学は経済学部であることから、基本理念として「経世済民」の思想的哲学の実践を意味しているということ。

第二点としては、昨今の政治経済の現状を振り返って、更には教育そのものの在り方について、論語で言うところの倫理、道徳、人の道と言うものがどれだけ教育現場に活かされて居るのかどうか、という問題を含めて、本学の論語素読教室の果たす役割は大きく、学んで是れを習うことは人生生涯の悦びとしなければならないと言うことを申し添える次第であります。